

四菩薩造立鈔

しろこそで 薄墨染衣一・同色袈裟一帖・鷲目一貫文給候。今に始めざる
御志、言を以て宣べがたし。何の日を期してか対面を遂げ心 中の朦朧を申
し披かん哉。

一 御状に云く、本門久成の教主釈尊を造り奉り、脇士には久成地涌の四
菩薩を造立し奉るべしと兼て聴聞仕候き。然れば聴聞の如くは何
の時乎、と云云。

夫仏世を去せ給て二千余年に成ぬ。其間月氏・漢土・日本国・一閻浮提の内
に仏法の流布する事、僧は稲麻のごとく法は竹葦の如し。然るにいま本門の
教主釈尊並に本化の菩薩を造り奉りたる寺は一処も無し。三朝の間に未
だ聞かず。日本国に数万の寺々を建立せし人々も、本門の教主・脇士を造る
べき事を知らず。上宮太子仏法最初の寺と号して、四天王寺を造立せしかど
も、阿弥陀仏を本尊として脇士には観音等四天王を造り副たり。伝教大師延暦寺

を立て給に、中堂には東方の鷲王の相貌を造りて本尊として、久成の教主脇士をば建立し給はず。南京七佛寺の中にも此事を未だ聞かず。田舎の寺々以て爾也。

かたがた不審なりし間、法華經の文を拜見し奉りしかば其旨顯然也。末法闘諍堅固の時にいたらずんば造るべからざる旨分明也。正像に出世せし論師人師の造らざりしは、仏の禁を重ざる故也。若し正法・像法の中に久成の教主・尊並脇士を造るならば、夜中に日輪出で日中に月輪の出たるが如くなるべし。末法に入て始の五百年に、上行菩薩の出させ給て造り給べき故に、正法像法の四依の論師人師は言にも出させ給はず。龍樹・天親こそ知せ給たりしかども、口より外へ出させ給はず。天台智者大師も知せ給たりしかども、迹化の菩薩の一分なれば一端は仰出させ給たりしかども、其実義をば宣べ出させ給はず。但ねぎめの枕の時鳥の一音を聞しが如くにして、夢のさめて止ぬるやうに弘め給候ぬ。夫より已外の人師はまして一言をも仰出し給事なし。此等の論師人師は靈山にして、迹化の衆は末法に入ざらん、正像

二千年ねんの論師ろんじ人師にんし本門ほんもん久成くじょうの教きょう主釈しゅしゃく尊そん並なら久成くじょうの脇士きょうじ地涌ぢゆうぎ上行じょうぎ等の四菩薩ぼさつ
を影かげほども申出もうしだすべからずと御禁おんいましめありし故ゆえぞかし。

今末法いままつぽうに入いれば尤もつとも仏ほとけの金言きんげんの如ごときんば、造つくるべき時ときなれば本ほん仏ぶつ本ほん脇士きょうじ造つくり
たてまつ奉たてまつるべき時とき也なり。当とうじ時は其その時ときに相あい当あたれば、地涌ぢゆうの菩薩ぼさつやがて出いでさせ給たまはんずら

ん。先まず其その程ほど四菩薩ぼさつを建こんりゆう立たてまつし奉たてまつるべし。尤もつとも今いまは然しかるべき時とき也なりと云うんぬん云ん。
れば天台大師てんだいだいしは後のちの五百歳さいとお遠あく妙みょう道どうに沾うるわんとしたひ、伝教大師でんぎやうだいしは正しょう像ざう稍す過ぎ已おわつて末法まつぽう太なだ近ちかきに有あり、法華ほつげ一じ乗じょうの機き今いま正まに是これ其その時ときと恋こいさせ給たまう。

日蓮にちれんは世間せけんには日本にほん第一だいいちの貧まづ者しきものなれども、仏法ぶつぽうを以もつて論ろんずれば一閻浮提えんぶだいだい第一だいいち
の富と者もの也なり。是これ時ときの然しからしむる故ゆえ也なりと思おもへば喜よろこび身みにあまり、感かん涙るい押おさ之が難く、
教きょう主しゅ釈しゃく尊そんの御恩ごおん報ほうじ奉たてまつり難がたし。恐おそろは付ふ法蔵ほうざうの人ひと々びとも日蓮にちれんには果報かほうは劣おと
らせ給たまい。天台智者大師てんだいちしやだいし・伝教大師でんぎやうだいし等とうも及および給たまべからず。最もつとも四菩薩ぼさつを建こんりゆう立たてまつるべき時とき也なりと云うんぬん云ん。

問とて云いわく、四菩薩ぼさつを造ぞうりゆう立たてまつるべき証文しょうもん之これ有あり耶や。
答こたえて云いわく、涌出品ゆうじゅつぽんに云いわく四導師どうし有あり一名み上行じょうぎ行み二名ふた無む辺へん行ぎ三名さん淨じやう行ぎ四し

問とて云いわく、四菩薩ぼさつを造ぞうりゆう立たてまつるべき証文しょうもん之これ有あり耶や。
答こたえて云いわく、涌出品ゆうじゅつぽんに云いわく四導師どうし有あり一名み上行じょうぎ行み二名ふた無む辺へん行ぎ三名さん淨じやう行ぎ四し

問とて云いわく、四菩薩ぼさつを造ぞうりゆう立たてまつるべき証文しょうもん之これ有あり耶や。
答こたえて云いわく、涌出品ゆうじゅつぽんに云いわく四導師どうし有あり一名み上行じょうぎ行み二名ふた無む辺へん行ぎ三名さん淨じやう行ぎ四し

問とて云いわく、四菩薩ぼさつを造ぞうりゆう立たてまつるべき証文しょうもん之これ有あり耶や。
答こたえて云いわく、涌出品ゆうじゅつぽんに云いわく四導師どうし有あり一名み上行じょうぎ行み二名ふた無む辺へん行ぎ三名さん淨じやう行ぎ四し

問とて云いわく、四菩薩ぼさつを造ぞうりゆう立たてまつるべき証文しょうもん之これ有あり耶や。
答こたえて云いわく、涌出品ゆうじゅつぽんに云いわく四導師どうし有あり一名み上行じょうぎ行み二名ふた無む辺へん行ぎ三名さん淨じやう行ぎ四し

名安立行等云云。
みやうあんりゆうぎやうとうんぬん

問て云く、後五百歳に限るといへる經文之有り耶。
とう いわ ご さい かぎ きやうもんこれあ や

答て云く、薬王品に云く、我滅度の後、後の五百歳の中に閻浮提に広宣流布し
こたえ いわ やくおうほん いわ わがめつど のち のち さい なか えんぶだい こうせんるふ

て断絶せしむること無けん等云云。
だんぜつ な どううんぬん

一 御状に云く、太田方の人々一向に迹門に得道あるべからずと申され候
ごじやう いわ おおたかた ひとびといつこう しゃくもん とくどう もつ そうろう

由、其聞え候。是は以ての外の謬也。御得意候へ。本迹二門の浅深・
よし そのきこ そうろう これ もつ ほか あやまりなり おんころえそうろう ほんじやくもん せんじん

勝劣・与奪・傍正は時と機とに依るべし。一代聖教を弘むべき時に三あり。
しょうれつ よだつ ぼうしやう とき き よ だいしやうきやう ひろ

機もて爾也。仏滅後正法の始の五百年は一向小乗、後の五百年は權大乘、
き しかなり ぶつめつごしやうぼう はじめ ねん いつこう じやう のち ねん ごん じやう

像法一千年は法華經の迹門等也。末法の始には一向に本門也。一向に本門の時
ざうぼう ねん ほけきやう しゃくもんどうなり まつぼう はじめ いつこう ほんもんなり いつこう ほんもん とき

なればとて迹門を捨べきにあらず。法華經一部に於いて前の十四品を捨べき經
なればとて しゃくもん すつ ほけきやう ぶ ほん ぜん じゅう ほん かつ

文之無し。本迹の所判は一代聖教を三重に配当する時、爾前迹門は正法
もんこれな ほんじやく しよはん だいしやうきやう じゆう はいどう とき にぜんしやくもん しょうぼう

像法、或は末法は本門の弘らせ給べき時也。今の時は正には本門、傍には
ざうぼう あるい まつぼう ほんもん ひろま たもつ ときなり とき しょう ほんもん ぼう

迹門也。迹門無得道と云て、迹門を捨て、一向本門に心を入させ給う人々
しゃくもんなり しゃくもんむとくどう いつ しゃくもん す いつこうほんもん こころ いれ たも ひとびと

は、いまだ日蓮が本意の法門を習はせ給はざるにこそ。以ての外の僻見也。私
にちれん ほんい ほうもん なら たま しゃくもん ほんい ほんもん ほんもん ほんもん ほんもん

ならざる法門を僻案せん人は、偏に天魔波旬の其身に入替て、人をして自身
ともに無間大城に墜べきにて候。つたなしつたなし。此法門は年来貴辺に申
含たる様に人々にも披露あるべき者也。総じて日蓮が弟子と云て法華經を修行
せん人々は日蓮が如くにし候へ。さだにも候はば、釈迦・多宝・十方の分身
・十羅刹も御守候べし。其さへ尚人々の御心中は量りがたし。
一 日行房死去の事、不便に候。是にて法華經の文誦進らせて、南無
妙法蓮華經と唱へ進せ、願は日行を釈迦・多宝・十方諸仏靈山へ迎取
せ給へと申上候ぬ。身の所勞いまだきらきら(快然)しからず候間、省略
せしめ候。又々申すべく候。恐恐謹言。

弘安二年五月十七日

日蓮 花押

富木殿御返事